

寄附圖書

# 商工經濟研究

第十卷 第二號

(昭和十年七月五日發行)

## 社會問題と社會政策

大泉行雄

はしがき

社會政策は第三學年後期に於ける選擇科目であるが、今年度は筆者不在のため休講となるであらう。例年百名前後の聽講者を得て、比較的希望者の多い此の科目は、若し今年も開講せられたならば、相當の志望者があるのではないかと想はれる。且又社會問題に對する序論的認識は、一般學生にとつても重要であるを思ひ、編輯者の徳愼と寛容に甘へて、こゝに稿本の一部を公にする。ひとつには以て、社會政策擔當者としての責務の一端を果さんことを願ひ、ふたつには以て、この種研究に關心を持つ學生諸君への、初歩的嚮導者たらしめんとするに在る。深く思ひを潜むるの士は、之を手がかりとして研究を進められたい。その手引きの一端ともなり得れば、筆者執筆の目的は半ば以上成功であり望外の幸福に感ずる。

社會問題と社會政策

社會に關する認識と思想が、著しく重要性を帯び、社會を批判的に且つ反省的に顧みて、之を科學的に取扱ふに至つたのは、十九世紀後のことである。固より、社會に關する思想は古くより行はれたものではあるが、社會成員を平均的に觀ての一般的認識は、十九世紀を以て一つの境界となすにさまたげない。

社會の本質に就ては、社會學的に種々なる規定が與へられるが、今之を發生的に見れば、社會は人間と共に在りとのマツキーバー流の觀察は一應承認することが出来る。人間の生存ある所に、何等かの形式と内容とをもつ社會がある。

社會の内包は常に變化する。生成し流動し消滅して、間斷なき運動過程を續ける。従つて、社會それ自體も亦常に變化しつゝありと言はねばならぬ。更に、一定の社會内部に於ける、人間生活の分化關係は、血族・職業・宗教・政治といふが如き關係によつて組織せられ、それ等を綜合する社會は、一個の渾然たる一體として、極めて複雑且つ錯綜せる内容をもつのであるが、ともかくも、人間の共同的生存と共に社會は存在することを認めねばならない。

共同生活體下に於ける人間交渉の諸關係即ち社會關係は、かゝる運動の產物であり、従つて又常に生成流轉してゆくものであるが、所謂社會問題も亦、この人間交渉の社會生活の裡に發生する現象たるに外ならない。

社會問題の意義を、定義的に把握して一點の不明をも残さざること、至難の業に屬する。蓋し斯ゝる通俗的流通語と化した言葉は、極めて多義を有し、如何なる場合にも適用される可能性があるからである。この言葉の弾力性が定義を困難にする。

社會問題を最廣義に説くものは、殆ど文字通りに社會に於ける一切の問題、少くとも社會人の關心に訴へる問題を總稱せんとする。社會問題を以て、人類の物質的・精神的な生活問題なりとし、それが社會の秩序及び維持に重大なる影響を及し、社會が之に對して何等かの政策方法を講ぜざるべからざる場合に社會問題の發生となると説く見地の如きは、社會問題の意義の廣い規定である。

私見によれば、所謂社會問題とは、社會に生起する一切の問題中より、特に或る種のもの限定して言ふ。即ち、社會問題に對しては、たとひ社會の問題ではあつても、社會問題とは稱し得ないものが對比されるのである。こゝに於てか、社會問題を、他の社會問題に非るものより特徴づける要素を把へねばならなくなる。例へば、社會問題を以て、社會制度の根本的缺陷より發生する一切の問題なりといひ、進んで、現代の社會問題は勞働問題なりといふが如き之である。

社會問題の特質を、社會制度の根本的缺陷に關聯せしめて理解することは、至當なる態度であらう。社會制度

の根本的缺陷から、必然的に發生する矛盾・不調和を以て、社會問題の核心となすことは、多くの識者の認容する所であらう。たゞ此の種の規定は、對象たる問題の性質を客觀的に觀察したもので、この意味の社會問題は、歴史的のあらゆる社會に存立したことを思はねばならぬ。

## 3

人間の社會生活を歴史的に觀て、如何なる特定社會にも、未だ嘗て根本的缺陷を藏することない社會制度は之を認めることが出来ない。特定社會に於て、一定階段の社會秩序が整備せられ、而も此の秩序が人間生活一般に對する統禦的勢力をもつ限り、社會制度の根本的缺陷は存在しない。この統禦力の發動が、不調和及び矛盾を矯正補修し得るからである。

然乍ら、凡そ形成せられたる制度は、靜的たることを特徴とする。換言すれば不動であり固定的である。それは一つの定型として存在するからである。

社會制度は靜的定型を特質とするが故に、社會現象を整理統禦する勢力をもつ。制度の支配力はこの定型に存するのである。社會制度は靜的定型を特質とするが故に、社會現象を整理統禦するの勢力を失ふ。定型は變化と運動に對して、遂にその適應性を失ふからである。

こゝに於てか、制度の支配力も無支配力も、共にその靜的定型なる同一本質に基くことを知るのである。評價

の尺度が不動固定のものであつて、始めて一切のものゝ價值が、測定せられ比較し得られるやうに、社會生活を規定し秩序づけ得る社會制度は又、不動固定であらねばならぬ。然乍ら、社會生活自體は運動と變化と進展とを特徴とする。これは、不斷の現象であり、徐々として刻々の變化を認識することすら困難であるが、而も一定の時間的間隔の前後を比較する時は、著るしい差異を認め得る。この差異の増大が、制度の支配力を無にするのである。

特定の制度は、その特定の條件を前提として、相對的に存在理由を認められる。従つて、所與の變化が、著るしい結果をもたらした場合には、制度はその改新を必要とせらるゝであらう。かゝる改新を必然的たらしむる事象こそ、社會制度に對する根本的對立物であり、社會制度の根本的缺陷と稱すべきものであらねばならぬ。社會進化とは、かゝる對立の間斷なく止揚せられてきた軌跡をこそいふ。されば、この對立矛盾を以て、社會問題と稱する時、社會問題は古代といはず中世といはず、將又近世現代といはず、あらゆる社會に存在したことを認めねばならぬ。

## 4

社會問題の中樞を、社會制度のもつ根本的缺陷に求め、根本的缺陷の意義を、筆者の説くが如く許されるならば、社會問題の客觀的事實は、一切の社會に存在したのである。

それにも不拘、社會問題が特に近世に於て社會の表面に浮び上るに至つた理由は、それ以前の社會に於て、かゝる根本的缺陷が一般的に反省批判せらるゝ程の發達に到達しなかつたためである。換言すれば、社會制度の根本的矛盾が、人間生活一般に、堪へ難き重壓としての自覺を與へ、批判を敢てせしむるに至らなかつたためである。

こゝに於てか、社會問題の發生には、客觀的事實の外に、主觀的要素を加へねばならない。主觀的とは、社會人一般の自覺を言ふ。存在する事實を取上げて、反省批判する態度を言ふ。社會制度の内包する矛盾が、その重壓を人間社會生活一般に加へ、社會成員が平均的に此の事實を認識し自覺し批判するに至る時、社會問題は始めて、その獨立の姿を浮び上らせるのである。

社會的矛盾が、その既成社會の基底を震撼せしめ、社會人をして、問題の重要性に反省自覺せしめる時、社會問題の獨自の存在が判然する。故に、社會問題の事實があつても、この反省自覺の進まない時代には、他の問題との對比に於ける社會問題の姿體は、未だ明瞭には浮び上らず、従つて所謂社會問題は重要性をもたない。

## 5

マルクスは、人口に膾炙する言葉を以て、一切の過去の歴史が階級闘争史たることを論斷した。自由民と奴隸、貴族と平民、領主と農奴、同業組合の親方と職人、即ち抑壓するものと抑壓せらるゝものとは、古來絶ゆる

ことなく闘争を続け、その結果は、革命的變革又は相争ふ諸階級の共倒れとなる。近世の有産者の社會は、封建社會の没落より生じ、有産者團と無産者團との對立を以て特徴づけられる。之がマルクスの觀察である。

すべて從來の歴史を階級闘争史と斷定し、その對立矛盾の止揚に於て社會の運動を見る辨證法には、惟ふに多分の考慮の餘地があるかも知れない。筆者は、かゝる問題に關する考究をこゝには暫く措く。階級的闘争であつたかどうかは別として、社會が常に運動しつゝあるものであり、社會の進化は、社會制度に於ける矛盾の重壓を契機として遂行される事實は、之を單純に看過することを許されないのである。

社會制度のもつ矛盾を、唯物史觀的に、すべて之を經濟に求めんとする推理は、或は正鵠を缺くかも知れない。けれども、過去に於て、經濟關係が著しく大きな役割を演じて居り、又現在に於ても、極めて重大なる位置に立つといふ事實は、理論の何たるを問はず、之を公平に認識せねばならぬであらう。この場合の問題は、唯物論か觀念論かではない。唯物論たると觀念論たるとを問はず、存在する事實を認めねばならぬといふのである。經濟を以て、一切の社會關係の基底となし、或は之に他よりも重要性を置くが如き態度には批判の餘地があるであらう。けれども、少くとも次の二つの事だけは、之を與へられたる事實として認容せねばならぬのである。

第一は、經濟は人間の生活と共に常に存在してきた事實である。學者が、時に自然經濟と名付け或は採取經濟と名付けるが如き、原始的經濟は、その規模と内包とに於て、發達せる經濟には較ぶべくもないが、尙且つ、殆ど人間と共に在りと言ひ得る。このことは、經濟が人間生活に於ける不可缺の關係であることを意味する。この

意味に於ての重要性は虚心に認められねばならない。且つ又、等しく事實として、經濟が人間活動の如何に大きな部分を被ふかを無視することが出来ない。若し極言すれば、多くの人々は、殆ど大多數の生活時間を、經濟生活にのみ傾注して居るとも言はれやう。

第二は、現在の社會に於ける社會的矛盾の根底が經濟關係に在るの事實である。有産者團と無産者團との二大對立は、事實として認められねばならない。従つて、少くとも、現在の社會問題は、經濟關係の基底を他にしては、之を解明するを得ないのである。

今日社會問題として重要視される、工場労働者問題、農村問題、婦人問題、企業經營の諸問題、運命的俸給階級の問題、失業問題、就職難の問題等を取上げて見れば、問題發生の中樞が、經濟關係であり、經濟的利益を異にする集團の對立である事實につきあたらざるを得ない。之は理論を別にしての、與へられたる事實である。

## 6

現存社會に於て、社會問題發生の中樞を、經濟的利益の對立といふ事實におくとしよう。かくすれば、この事實から、必然に又次の事實の發生が認められる。即ち經濟的支配部分と被支配部分との分立之である。この被支配部分が、支配の事實と原因に自覺し、與へられたる恩惠的又は慈善的幸福に満足せずして、自ら獲得したる幸福に達せんとする時、社會問題は愈々独自の姿體を顯現するのである。之は、經濟的被支配部分が、その支配、



束縛より自己を解放せんとする要求に外ならない。他律に對する自律、抑制支配に對する自主獨主、與へられたる恩恵に對する自ら獲得したる自由。之等が、被支配部分の自覺と共に強調せらるゝ要求であり、社會問題の推進力である。

かくの如く、現存社會の所謂社會問題を、經濟的支配關係に於て認識し、經濟的階級對立に於て理解することは、思ふに至當であり、思想上如何なる主義に立つを問はず、公平に認容せられねばならぬのである。この點に於て、社會主義が資本主義社會に下す批判部分は、傾聽すべきものを多く包む。後にも觸れる如く、社會政策は社會問題に對する政策に外ならぬものであり、かゝる政策の發動は、政策せらるべき缺陷の存在を前提する。

然らば、先づ如何になすべきかの政策に先行して、如何に在るか又何故に然るかの二面を明らかにせねばならない。この、如何に在り又何故に然るかの問題は、屢々反對説の批判の中に、最もよく示されるのである。社會主義の理論や理想や建設的主張には、批判の餘地が多分に在すると思ふが、現存社會の缺陷を指摘する諸點には正鵠を得るもの少なからず、從つて問題の核心にふれるものゝあるを看過してはならない。

## 7

暫く史的考察を試むるに、古代社會は英雄支配の社會である。古代の支配者又は主權者は即ちこの個人的英雄であつた。その權威を裏書きせんために、時には神の名を援用した。後世の帝王神權説は、かくして古代に早く

も萌芽を認め得る。

こゝに英雄とは、必ずしも武力的たることを唯一の特徴とはしない。所謂、政を爲すに徳を以てし、北辰其の所に居て衆星之に共ともふが如き高德の士も考へられる。けれども、之を平均的に言へば、文化の低い古代には、武力的威力は極めて重大なる支配的權威であつたに相違ない。且つ又、社會に對する自覺、批判の如きはなく、一般に衆にすぐれたものが、即ち支配者として一般を統禦し、従つてそれが國家の政策をなしたのであつた。されば、極言する時、一個人或は數人の個人の私的慾望、趣味等が、即ち國家の政策として發動せしめられた。個人の活動と國家の行動が二にして實は一であつた。古代の商取引が、對外的には主として奢侈品に占められたる事實は、國王又は貴族等の少數者の趣味慾望が經濟活動に反映する證左である。古代の絶ゆる間なき戰爭、鬭争の事實は、屢々英雄的征服慾の満足に基くことを教へる。

降つて中世封建社會に入れば、人も知る如く中央の權力地に墜ち、國內分立して地方分權となり、地方の諸侯・領主が獨立し、時には都市が單位となつて、都市經濟を出現した。この場合にも、英雄的・專制的支配は連綿として續き、殊に貴族・武士の如き身分的支配による抑壓・支配が行はれた。この支配統制は、近世初頭に至つて、個人的英雄に代るに統一國家を以てせらるゝに至つた。個人は常に國家の下位に立ち、個人自體の獨立自由は無視せられたのである。

十八世紀の自由思想は、個性展開の上に一大啓蒙的役割を演じたものであるが、固より此の場合にも國家の必

然的又は任意的職能を否定するものではない。國家が、濫りに其の權限を伸長し、個人の獨自なる生活にまで立入ることを抑制せんとするのである。最も良き國家は、最も少きをなす國家であると考へられた。

凡そ個人の生活には、之を圍繞して一定の生活領域があり、この獨自の世界に對しては、何びとも一指をだに染めることを許されず。之を無視して一律に統制せんとすることは、人間の個性を没却せしめて、恰も羊群の如くに取扱ふものである。人間生活の意義は全く失はれると言はねばならない。

社會の進歩發達は、個性の獨創的發動によつてのみ促される。そのためには、能ふ限り個人の活動を自由にせしめねばならない。之が自由主義者の主張であつた。

## 8

自由主義が社會の生産に一大變化を與へて、産業革命を招致し、資本主義社會を完成せしめたことは人の知る如くである。

資本制生産組織は、財の質と量とに於て、甚だしく増加せしめたことは疑ひない。唯、すべての成員がその恩恵に與るといふ分配に於て、何等の方策をも豫定しなかつた。蓋し、經濟的自由主義は、その根本信條として、自然的調和を重要視したからである。

然乍ら、自由競争は優勝劣敗を結果し、征服と被征服、支配と被支配、權力者と無力者とを出現させる自然的

傾向をもつ。このことは、自由競争の内包する一大特性であつて、之あるが故に競争は、その偉大なる効果を現はすのであるが、又之あるが故に競争は困難なる社會問題の禍根ともなるのである。

かくの如くにして資本主義社會は、經濟的三大階級即ち有産者團對無産者團の對立を以て其の特徴となすことを知るのである。この三大階級の中間を構成する層は、固より存在するのであるが、その動向は一般的に下降的又は現状維持的であつて、少くとも原則的に上昇的とは言はれない。こゝに上昇的とは、中間層を成す個人の努力が、その個人をして遂に支配層に引入れる傾向を言ふ。論者は時に、極めて樂天的思想を以て、一介の勞働者又は俸給生活者が、その正常的努力によつて資本家となり得る夢を説くのであるが、かくの如きは資本主義の發展上向期と、その爛熟衰兆期との差異を無視するものである。殊に、かくの如きは理論といはんよりも、眼前の事實なることは一入興味あることである。

今日、その勞働力以外に社會に提供すべき何物をも持たない者は、原則上支配階級には成り得ない。若し強ひて其の機會を求めれば二つある。ひとつは、出生てふ偶然によつて先天的に支配層の中に生れることである。ふたつは、家族制度の關係を通じて、後天的に支配層に拾ひ上げられる場合である。この二つの外の機會は、殆ど考慮にすら入り得ない。

現在社會の支配關係が、經濟に基底をおくことは上來説くが如くである。社會的勢力又は權力が經濟的支配力に比例して存在する。社會生活の各般に渡つて、經濟關係或は所有關係が、如何に密接であるかは、日常生活の一切が之を證明するであらう。一切の價值を貨幣で測定する貨幣經濟の時代には、提供する貨幣量に比例して、社會的勢力又は特權が存在する。貨幣提供の能否が、社會の特殊的地位又は關係を、彼に約束し又は拒絶する。

自由思想は、かくして人間の社會生活に對して二面の作用をなした。それは一面に於て人間を解放すると共に、他面人間を再び束縛した。個人的自由を宣揚して、國家統制の羈絆より、個性の枯死を救つたのは正しく自由主義思想に外ならなかつた。自由競争の結果、反つて獨占支配の反對物へと轉化して、自由は獨り勝者・強者の自由となり、多數の自由喪失者を出現せしめたのも亦自由主義思想に外ならなかつた。

凡そ社會生活に於て、成員たる個人の存在に重心を置き、共同體の存在を個人の爲めに在りと觀るか、或は、共同的全體に重心を置いて、個人の存在を全體の中に没却せしめんとするかによつて、相異なる思想體系を發生する。その何れに重心をおくかは、惟ふに一つの世界觀に屬し、科學的に決定することは至難であらう。今日、科學的に言ひ得る所は、その相關的關係に在る。如何なる個性の尊重者と雖も、共同體の事實を無視することを得ず、従つて、苟くも個體を綜合してその上に獨立なる共同的全體を認むる限り、個人的自由といふも、決して單純に文字通りのレッセ・フェールではあり得なくなる。全體的規制の存立する限りに於て、個人的自由は多かれ少なかれ、支配をうけ制約をうけねばならない。他面、如何なる共同體の尊重者と雖も、成員たる個人の獨自な

る人格を無視し去ることは不可能である。個人の手べてが、それ／＼特異なる個性を滅却して、一切均一なる生物と化し、一個の命令が之を機械的に動作せしむるとすれば、それこそジョン・スチュアート・ミルの所謂羊群と何等變る所がなくなるであらう。且つ又、現代教育が中樞とする所は、人格の完成であり、個性の展開であり、これ等は何れも人間を羊群と見るのとは正反對の態度である。故に、共同體の認識と雖も、個人の獨立的存在を無視することは許されない。

この相關的關係の極致は、之を想定することが出来る。己の欲する所に従ひて矩を越へずとの境地が正しく之である。社會は成員の個性を展開し保護すると共に、成員は、獨自の生活意義を發展せしめつゝ、同時に社會の發達を促すが如き關係の完成である。これは人間社會生活の理想であらねばならない。

## 10

社會と個人との相關々係が、右の理想状態を去ること遠い今日、その不備・不調和こそ即ち社會問題に外ならぬ。地上の人間に在つては、この不備・不調和は永遠かも知れない。けれども、人間生活の意義は、想定せられたる理想と不調和との對比より生ずるのである。

社會政策は、その概念を規定せらるゝに當り、この社會問題の存在を要件とする。社會政策が社會問題に對して、如何なる態度をとるかによつて、二個の大なる範疇が分たれる。一は、現に在る社會政策であり、二は、在

るべき社會政策である。

前者は、現實の特定社會に於ける諸條件を前提として、現實に存在し、又は存在すべき社會政策を對象とする態度であり、後者は、かゝる特殊的・相對的態度を超脱して、一般的・普遍的社會目的への過程としての社會政策である。

さて、後者の態度に於ける社會政策の尋究は、その最後に於て遂に人間社會生活の究極的理想とも言ふべき、一個の哲學的要請に到らざるを得ないであらう。蓋し、特定の時、處、人、の制約を越へて、あらゆる時、處、人に共通なる社會政策を定立せんとすれば、具體的なる個々の政策を越へて、一般的共通者を探究せねばならなくなり、これは、普遍的社會理想の追求となるからである。在るべき社會政策とは即ち是である。

之に反して、在る社會政策は、現實に顯現しつつある社會的矛盾に向つての、直接なる態度である。多くの識者は、この場合、現存社會經濟制度の基礎たる私有財産と自由競争を否定することなく、この原則に立ちつゝ、社會に發生する弊害を政策的施設によつて制限又は除去する態度を認容する。今日、所謂社會政策として、實踐に移される現實の方策は、この在る政策に於て示されて居ると言はねばならない。

## 11

凡そ獨り社會政策と言はず、一切の政策は、少くとも三個の核心的問題を藏する。曰く、

- 1、政策の主體の問題
- 2、政策の客體の問題
- 3、政策の理想の問題

政策主體の問題は、誰が政策を實踐するやの問題で、即ち *what* の問題である。政策客體の問題は、誰に向つて政策を實踐するやの問題で、即ち *to whom* の問題である。政策理想の問題は、何に向つて政策を實踐するや、換言すれば、政策の方向は何處に在るかの問題で、即ち *where* の問題である。

之等の三者は何れも、それ／＼獨立に大なる考究領域をもつてゐる。今、通常理解せらるゝ處によつて一應の解明を與へれば、今日、政策主體を成すものは、國家及び之に準ずる團體に外ならぬ。このことは、今日の文化社會では、その共同體の發達せる形式として國家が最も優位に立つことによる。人々は時に、個人又は少數の個人の意志遂行に政策の名を與へること無しとしない、けれども、かくの如きは、政策の意味の轉用又は不用意なる使用であつて、政策は、全體意志を以て、その發動者としなければならぬ。個人の恣意による活動を以て、政策の發動とは言はれない。かゝる個人的活動の上に立つ統一者として、始めて政策主體は其の存在を保持する。

政策客體は、特定の國家内に生活する個人であり、正確に言へば、個人の活動並にその社會的關係である。同時に、かゝる個人の共同より成る社會自體である。社會生活の關係は、極めて複雑多端なる諸部面と諸領域を現出するのであるが、政策は、全體的觀點より之に向つて發動するのである。



かくの如くにして、最後に政策理想の問題が来る。之は政策を方向づける指導概念に外ならぬ。

12

政策理想の問題を取上げて、之を獨立に考究する時は、曩にも觸れた如く、遂に哲學的要請にまで立ち到らねばならない。政策の在るべき相が、主としてこの場合問題となる。

既に所謂、價值判斷の問題として、一應検討せられた問題であることは、世人周知の如くである。政策の指導概念として、普遍者を求むることの不可能を説く論者に對して、その可能を主張する人々がある。

こゝでは、之等の双方に就て、復習的記述を繰返すことなく、率直に我等の觀る所を叙べるにとどめやう。

政策理想として、普遍者を要求することは、惟ふに社會を成す人間の永遠なる願ひであらう。時・處・人に制約せられない共通者は、具體的なるものであることを許されぬであらう。なぜなれば、既に松として具現せられたものは、杉でも檜でもあり得なく、況んや雀や鯉ではあり得ない。松にも杉にも檜にも共通なるものを求めんとすれば、松と杉を分つ差異に就てどなく、松と杉に共通なるものを抽象せねばならぬであらう。次に檜を加へ、櫻を加へ楓を加へ、進んでは蒲英公を加へチューリップを加へ、かくしてそれ等一切のものに共通なるものを抽出してくる時は、そこには單に植物といふが如き一般概念が成立するであらう。若し又、更に雀を加へ鯉を加へ、更に種々なる獸類をも加へて、共通者を求める時は、例へば生物といふが如き一般概念を得るであらう。

政策理想に在つても過程は同様である。一般的なるものを定立せしめんとすれば、例へば社會的厚生とか人格完成とか一般的幸福とかの名で示される概念をあげざるを得ない。

けれども、植物が、その具現に於て、單に植物自體といふものがなく、必ず松・杉・檜・チューリップ等として具體化せらるゝやうに、政策理想も亦現實生活に現はれる時は、單に厚生・幸福・人格完成それ自體として現はれることは出來ず、必ず生活關係の中に、特定の形をとつてあらはれねばならない。或る目的のための法律とか、學校制度とか、その他百般の事實的存在たらざるを得ないのである。

かくて、具體化したものは、特殊なものである。それ故に、そのものは普遍者ではあり得ない。松として既に、特定形態を興へられたものは、最早杉でもチューリップでもあり得ない。松の特性を以て即ちすべての植物の特性と言ひ得ないであらう。或る時代、或る場所、或る國民に行はれた教育の主義が、一切の時代・場所・國民に通用するとはいはれない。こゝに於てか、理想は社會生活に具體化せられたる時は、それは既にその普遍性を失つたものであることを知らねばならない。

## 13

けれども、松・杉・檜等を外にして、植物自體といふ具體者の存在し得ないことを以て、植物概念の否定とはなり得ないやうに、社會生活に於ても、政策の理想の共通的概念の定立を以て無用なものとは言はれない。且つ

又、かゝるものゝ存在を否定することを許されない。特定の教育制度は、他の時代には適用し難く、改鑿せられ時には廢止すらされるであらう。けれども、教育といふ思想は常に流れてゐるのである。この常に流れて居るものこそ、一般者の精神に外ならない。

理想が、現實生活に移される時は、必ず具體的なものとなつて表はれる。それ故に、それは普遍的でなく、絶へず變動するであらう。それにも不拘、人間社會生活を一定の大なる秩序に置くものは、かゝる具體的變動を通じて、常に之を統一するものがあるからである。それは一つの一般者なるが故に、形態をとらない。形態をとらぬが故に如何なるものにも表はれ得る。鏡は、自らは自身の影をうつさざるが故に、一切のものゝ影をうつし得る。一切のものゝ影をうつし得んがために、それは常に空であらねばならぬのである。

鏡に映つる己が顔の憂鬱なる時、人はその氣分を平靜にし、心氣を和けて再び映つて見よ。このたびは、優和愛すべき我が面影を見るであらう。具體化せられたる理想は、必ずしも常に全成員を厚生にし福祉に導くとは言はれぬかも知れない。けれども、その具體化を反省し改修してゆく時に、愈々それは理想そのものに近くなつてゆくであらう。凡そ、人間生活の一切は、歴史的に見て、この具體者の醇化過程に外ならぬと言つてよい。

理想が、現實生活に現はれる時、既にそれは普遍者ではないことを説いた。それにも不拘、それが意味あるの

は、常に究極なるもの、具體化と見られるからである。或は、究極なるものによつてその方向を與へられて居るからである。鏡に映つる日々の我が面影の、時にはいと美しく、時にはこのもしい變化はあつても、常に願ふ所は、一層の美しくさと優しさであるが如くである。

然乍、具體者が究極に於て、理想に統括せらるべしとの社會信念を以て、常に樂觀視し、放任の中に、すべての正常なる展開が行はれると早計に考へてはならない。我が面影の優美なる映像のためには、常に訓練と醇化とが必要である如く、理想の具體化も亦、不斷の反省の下に置かれねばならない。資本主義社會に於ける關心は、この具體化が、屢々經濟的利益によつて被はれ、特殊利益のために犠牲にせらるゝ危険に向けられる。全體の名に借りて、部分的、階級的利益を追求することは、政策の正道ではあり得ない。

従つて、若しかゝる危険ありとすれば、そこに社會政策が、政策の王道より發動する意味があるのである。社會問題が社會政策の對象となるとは、即ちこのことに外ならない。

## 15

社會問題の對策としての社會政策を見る時、一つの重大なる難關が横はつてゐるのを看過できない。所謂、社會政策の限界が之である。社會制度の根本矛盾に向つて發動すべき社會政策は、如何なる程度に於て效果的であり、又如何なる限度に於て效果的であるか。

この場合、再び政策理想が、経済的利益によつて、その正道を失ふ危険が考へられるのである。少くとも今日まで、実践せられてきた社会政策は、社会人の期待を遠ざかること遙かに大きく、時には屢々失望さへ與へたことを知る。過去を以て總べてを判断することは不當であらう。けれども、従來の経験は、少くとも社会政策の效果實現の容易ならざることを教へるには誤りはない。社会政策の實踐に於ては、殊更に、この點が考慮せられねばならぬであらう。